

イエスは死刑の判決を受けた後、兵士たちによって侮辱され、十字架につけられてもなお、多くの人々から罵られました。その間、一言も話していません。イエスは息を引き取られる直前に、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と一言叫んだのです。この言葉はマルコによる福音書のアラム語の言葉をヘブライ語に書き換えたもので、詩編 22 編の引用です。内村鑑三氏や遠藤周作氏らは、イエスは神さまに見捨てられながらも、究極的にはこの詩全体の精神、神さまに全幅の信頼を置いて、静かに死についた、と考えています。また、荒井献氏や現代の聖書学者は、神さまへの絶望を言い表す詩編 22 編の冒頭の句しか口にすることができなかった、イエスは人間からだけではなく、神さまからさえ見捨てられたという徹底した孤独感をもって死を遂げたと考えています。私はイエスの叫びは幼い頃から記憶した詩編などの言葉の中から、自分の死を目前にした状況を表現する短いセリフとして、この言葉が口から出たのではないかと思うのです。それは、初期キリスト教徒たちによって挿入された引用の言葉ではないのです。イエスは十字架にかけられた後、絶望して、自分を見捨てられたという中でなお神さまを「わが神、わが神」と呼び、その「わが神」に向かって絶望の叫びをあげているのです。

ところで、ルカによる福音書はこの言葉を削除し、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と記し、イエスは、神さまに対する徹底的な信頼を表明し、静かに神さまに自分の霊を委ねているのです。また、ヨハネによる福音書においては最期の言葉は「渇く」と「成し遂げられた」で、イエスの死は神さまが子なるイエスに行くように与えられたすべての業が成し遂げられ、聖書の言葉が実現された「時」なのです。

百人隊長たちは、イエスの死と共に地震などの終末的出来事を見て、非常に恐れ、告白しています。一方、同じ言葉を記しているマルコによる福音書ではイエスが地上にあって罪人として差別されている人たちの位置に立ち、十字架にかけられ、人にも神さまにも見捨てられ、孤独の中に凄絶な死を遂げたがゆえにこそ、「神の子」として告白されていました。また、ルカによる福音書では、百人隊長は、「本当に、この人は正しい人だった」と告白しています。ルカに描かれるイエスは、神さまから選ばれ、その意志に従順に従う、「正しい人」なのです。

「イエスの死」に至る経緯は四つの福音書でほぼ一致しています。しかし、「イエスの死」の意味づけをめぐっては、福音書の間で違いが見られ、それがはっきりと見られるのはイエスの最期の言葉と百人隊長の告白の内容です。そこに各福音書の著者に固有な「イエスの死」の意味づけ、つまりイエス・キリスト理解が表されているのです。